

# 3月報(2026年) 萌 カトリック福山教会



福山教会活動テーマ：

「喜びをもっていのちをもたらず福音を社会に伝えよう」

〒720-0808 福山市昭和町7-26

☎【084】923-0614 FAX【084】923-0615

e-mail : fuku-ch@ktd.biglobe.ne.jp

## 【広島宣教ひろばに参加して】

重松 喜美子

2月23日13時より、広島教区「宣教ひろば」が開催され、ミカエル神父様、養成の藤井幸恵さん、重松の3人で参加しました。

各地区、1箇所集合し、それぞれをzoomで繋ぐという形成で広島地区は祇園教会が会場となり、宣教司牧評議会メンバーを中心に神父様、修道会シスター、信徒の方々が各教会から参加されました。

前半は、座談会として平和の使徒推進本部で尽力された歴代の神父様方と本部長の方がこれまでの広島教区におけるシノドス的活動の経緯の振り返り等についてお話をされました。

後半は、各地区の参加者が10～15人程度のグループに分かれて「信仰共同体の現状と、直面している困難に光をあて、ともに歩むあたたかさのある教会を目指すために私たちはどのような働きに呼ばれていますか」というテーマで「霊における会話」を実施しました。

第1ステップ(わたし)、第2ステップ(あなた)、第3ステップ(私たち)という3段階のうちに、みことばを参加者で唱和し、沈黙の祈りの中で、心に浮かんだことを分かち合います。祈りの内に、いろいろな思いや課題、問題点、などが述べられました。

例えば、私が参加したグループでは、『一人ひとりの声かけが大切』(多くの方が挙げられました)

『外国人の信徒の方々との共働』『いろいろな問題を契機として、チャンスととらえて楽しもう』という前向きなことばが並びました。

「霊における会話」は何か結論を引き出すことを目的とするのではなく、各人の分かち合いを



『祈り』ととらえ、よく聞き、尊重することが求められます。

今回初めて参加しましたが「聖霊のはたらきによって、思いが浮かぶ、思い巡らす」ということが少しだけ分かったように思います。

最後に、各地区、各グループの分かち合いのまとめの報告があり、その後、白浜司教様

の「イエス様を中心に、イエス様に立ち戻りながら、今あるひとつ一つの課題を皆で共有しながら助け

合って乗り越えていける、と思っております」というお話と、派遣の祝福をいただいて閉会となりました。

福山教会の大人の教会学校では、ミカエル神父様が「シノドス流の教会」ということを、分かり易くお話してくださいます。そのお話と、今回の宣教ひろばでの霊における会話の中で得たことがつながり、信徒一人ひとりが担っている宣教という役割を心に留めて進んで行くことの大切さを再認識した貴重な機会となりました。感謝いたします。

## 【山岸先生との思い出】

松川 公美

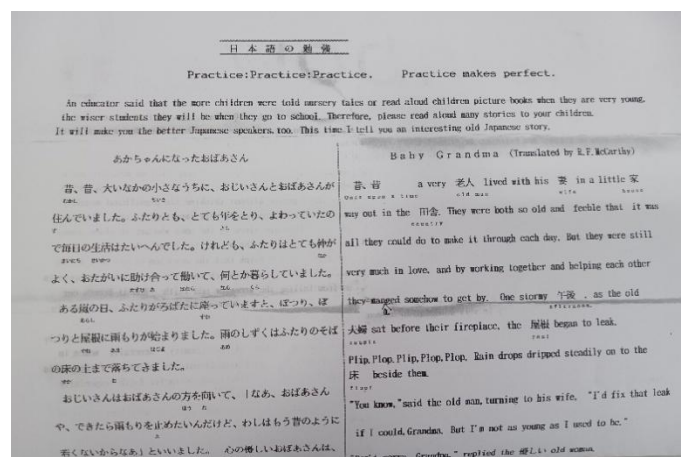
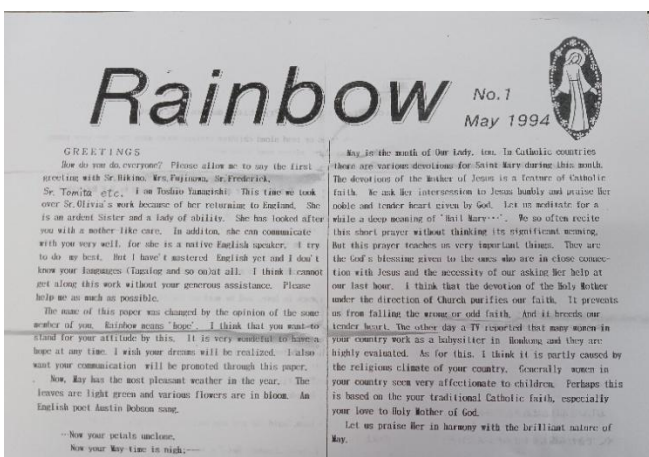
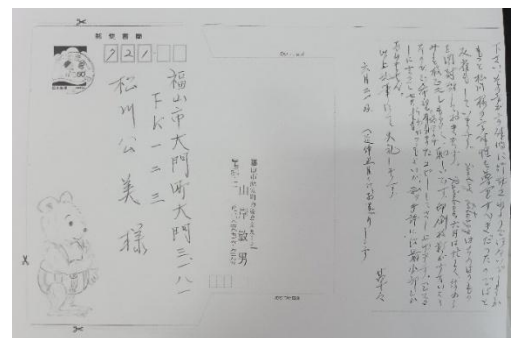
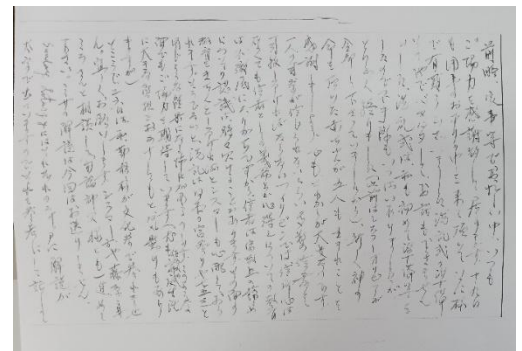
約30年前、受洗して数年後、長女が1才の時、山岸先生から英語ミサのお手伝いを依頼されました。

当時の御聖堂では、小さい子どもが泣くことは親の責任だと外に出ることになっていました。その様子を見かねたのか、山岸先生は私に声をかけてくださったのだと思います。

英語の典礼 (Sundau Liturgy) を用いて読み合わせをした後、山岸先生の手作り冊子 (Rainbow) で日本語の勉強もされておられました。

用事がある際には、あらかじめ費用の安い書簡を使って、中に冊子を折りたたんで入れ、送っていただきました、その便りにはいつも娘がよろこぶ可愛いぬいぐるみのイラストを色鉛筆で書いてくださいました。(掲示板に貼っています)

山岸先生の心優しいお人柄があらわれています。他者の立場に立って、国籍を問わない信仰の道を開拓されてゆかれた姿に心から感謝いたします。



## 【旅立ちのミサ】



新年度から新しい環境、新しい場所で生活を送る子どもたちが、これまでにない出会いと発見の中で、自分の中にあるチカラを見出し、神様の豊かなお恵みの中で歩いて行くことができますように……教会の先輩方はいつも応援しながら見守っています。



【ブラザー阿部のみ言葉のおすそ分け】～使徒パウロのガラテヤ教会への手紙6章～

『皆さん、私たちの主イエス・キリストの十字架のほかに、誇るものが決してあってはなりません。』

今日は、福音書にも心に残る言葉がたくさんあったのですが、パウロのこの言葉に心惹かれました。私たちにとって、「主イエスの十字架を誇る」こと。何と素晴らしい恵みでしょうか。十字架は、苦しみのしるしです。誰でも十字架を背負うのは苦しいのです。イエス様でさえ、ゲッセマニの園で、「父よ、出来ることなら、この杯を、私から取り除いてください」と叫びます。

パウロは、この十字架を私たちの「誇り」とするのです。イエス様の十字架の痛み、そして、死者のうちから復活することによる私たちの救いによって、この十字架が、私たちにとって、永遠の幸福に繋がるものとなるのです。



私たちにとって十字架が、この世の苦しみに終わるならば、私たちはとても耐えることは出来ないでしょう。キリストは、十字架の痛みを通して、永遠の命という素晴らしい恵みに変えてくださったのです。

自分の十字架を喜んで背負える方は、ほとんどおられないでしょう。しかし、その痛みが永遠の命に繋がる道であり、イエス様の痛みを、少しでも分かち合う恵みを頂くこと、そして、その十字架の痛みが、自分の回りで苦しんでいる人々の、重荷を担うことになるならば、その痛みが小さな喜びと恵みに変わることになること。それを信じて、一步ずつ歩みたいですね。

【2026年3月南相馬便り(86)】

援助マリア修道会 南相馬修道院 北村令子



6版 2025年(令和7年)12月16日

### メガソーラー 支援廃止へ

政府、2027年度から環境破壊懸念で  
メガソーラーの支援廃止を断念

政府が太陽光発電の全額補助を廃止する方針を断念したことが分かった。環境破壊懸念で、2027年度からメガソーラーの支援廃止を断念する方針を断念したことが分かった。

2009年11月 家庭用太陽光発電の全額補助を廃止する方針を断念したことが分かった。

11年3月 東日本大震災が発生

12年7月 太陽光や風力など、再生可能エネルギーによる電気を安定供給で高く買取りの制度が開始

25年2月 政府がエネルギー基本計画を策定。再生可能エネルギーの割合を定めた。2030年度の再生可能エネルギーの割合は、現在の約2倍に引き上げられる。

12月15日 国が大規模太陽光発電所(メガソーラー)の支援廃止を断念する方針を断念したことが分かった。

昨年12月初旬に、NHKでショッキングなニュースがありました。釧路湿原に、広大な範囲にソーラーパネルの海が出現したとのこと。東京ドームが6個分。

福島の浜通りは、太平洋沿岸が津波と原発事故によって、居住不可の土地になって、そこにソーラーパネルの海が出現しています。南相馬から福島市に行く途中も、いたるところ山が削られ、不気味な

黒い津波を思い出させるパネルが敷かれています。木を伐採し、山肌が削られていく様に自然界の悲鳴が聞こえてくるようです。

政府はやっとメガソーラーの規制に動き出しました。原発に頼らないで自然エネルギーを活用する太陽光発電は確かに有用な策と思いますが、環境破壊と景観の破壊、そして耐用年数を過ぎた時の解体処理にどのような問題が発生するのかなどは未知数です。原発のような危険はないとしても、リサイクルにも大変なコストがかかるようで、なかなか難しい問題のようです。ただ野放図に広がっていくのだけは何とか食い止めないと、ここ浜通りは、日本一美しい里山の地域から、日本一景観の悪い地域に転落してしまうのではないかと思います。政府の規制は、2027年度からとのことで、遅いとは思いますがやらないよりましなので賛成です。

風力発電も問題ありのようです。南相馬市の北の方の鹿島区に、風力発電の風車が設置されていますが、「夜中でもブンブンという音がするので気になり始めると眠れなくなったりする」とか、非常に敏感な人には、風車からの空気の振動や地を伝って感じられる振動で、眠れなかったり頭痛の原因になったりするようです。

人間の作るものは、どんなに頑張っても、完璧なものはありません。新しい技術でより良いものを開発し、より便利でより豊かな生活ができるのは素晴らしいことですが、その過程に一人一人の、より小さく、より無力な人が大切にされる技術の開発を心がけていただきたいと思います。そしてリスクに対してそれを解消できる技術も同時に開発することを願っています。小高に完成するロケット宇宙産業IST社にも願っています。



(2025年12月20日の福島民報誌)

### わたしの召命物語



皆さん長い間わたしの召命物語に付き合ってくださいありがとうございました。このあたりで「召命物語」はおしまいにしようかと思います。終りに当たって八十余年の生涯を神様と、関わってくださったすべての方に感謝を込めて「私のマグニフィカト」の祈りを捧げます。

私のマグニフィカト (感謝の祈り)

わたしの魂よ、主をたたえよ、

わたしの内にあるものはこぞって聖なる御名をたたえよ

わたしの魂よ、主をたたえよ、

主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない (詩篇 103 : 1, 2)

主よ、八十余年という長い歳月の、一日一日をあなたの慈しみ深い愛で満たしてくださったことを感謝いたします。人間的にも、信仰者としても、奉獻生活者としても成長させていただき、幸せな歩みをたどらせていただいたこと、感謝の言葉が見つかりません。

豊かな恵みに満たされた日々を思い返す時、そこにいてくださった一人一人のみ前に感謝を伝えたいと思います。でもあまりにも多くの人、そして今は亡き人、遠くにある人、数えきれない人と数えきれない出来事を前に、私は自分の小ささを感じます。神様のお心を通して、すべての人に心からの感謝を伝えていただくしか方法がありません。

また、嬉しいことばかりではなく、思い出から排除したいようなことも沢山あります。でもそのことを通して今の私があることを思うと、この痛い思い出も感謝の泉です。

とりわけ、私が絶対なりたくないと思っていた学校の教員として過ごした17年間の最初の頃、人格分裂を起こして、立ち直るのに5年間かかったあの時期は、私の宝となった体験でした。5年間本当にしんどい日々でした。自分が廃墟の中に裸で立っているあの感覚は忘れられません。その廃墟に立っているのは赤ん坊のようになった私です。霊的指導者と共に歩み、長い長い霊操の時をくぐって、御父に出会えた、体に背骨がバーンと入ったと感じた体験。そこからあれほど逃げようとしていた学校を自ら受け容れていくことができた、自ら自分の派遣の場、「イエスと共に生きる場」として受け容れることが出来た、主の憐れみと慈しみの恵みは、私の存在の核に刻まれた恵みです。学校の事務局と教員を合わせて46年間も学校での使命を生きさせていただきました。また、自分の痛み、原発被災地で感じる人々と大地（地球）の痛みを、当事者となって共に苦しんでくださるご聖体のイエスの痛みに合わせて捧げる聖体的ミッションが今の私を活かす大きな恵みです。母マリアのように、「この身になりますように」と祈りながら。

これらのことを通して、父なる神と主イエスと聖霊の交わりの中に生きる喜びを私はいただいてきました。主からの無償の恵みとして！！

わたしの魂よ、主をたたえよ、

主の御計らいを何ひとつ忘れてはならない

今日までありがとうございました。皆さんおすこやかに過ごしてください！

### 『ミカエルフェスタ献金のお礼』

福山教会の皆様

この度はミカエルフェスタからの多額のご寄付をありがとうございました。

本当に感謝です。この地域の人たちのことを心にかけてくださる

皆様のお心の温かさを、私たちのささやかなかわりで、伝えていきたいと思ひます。

3月はいろいろの行事が重なって、忙しいときです。

テレビでも15年前の大震災、津波、放射能の拡散などのニュースがたびたび放映されます。そのたびに、忘れてはならない大きな災害だったことを、改めて記憶することの大切さと同時に、このことによってまた引き起こされる被災者のフラッシュバックによる苦しみを思うと、あまり報道しないで！と言う矛盾した気持ちになります。

多くの方から「この時期になると、気持ちが沈むんだ！！」との言葉を聴きます。心の復興には時間がかかります。私の経験からでも何十年と言う時が経って現れてくることもあるのです

から。どうぞお祈りください。神様しか本当の意味での癒しはできないと思います。祈りこそ神さまが直接人の心に触れてくださる、私たちにできる力ある「わざ」だと思います。この忙しい時期を皆様お大事にお過ごしください。感謝の祈りを込めて！！北村令子

### 【帰天のお知らせ】

ヨセフ 高森 毅様 (78 歳)

ミカエル 山内 和行様 (88 歳)

モニカ 西谷 直子様 (90 歳)

謹んでお知らせします。どうぞ心を合わせてお祈りください。

### 【3月・4月の行事予定】

3 月		4 月	
1(日)	四旬節第2主日	2(木)	聖木曜日(主の晩餐)
8(日)	四旬節第3主日	3(金)	聖金曜日(主の受難)大斎・小斎
15(日)	四旬節第4主日 日曜学校終業式	4(土)	聖土曜日(復活徹夜祭)
19(木)	聖ヨゼフ	5(日)	復活の主日 日曜学校新学期
22(日)	四旬節第5主日 四旬節黙想会	12(日)	初聖体
29(日)	受難の主日	26(日)	14時～墓地ミサ

### 【編集後記】

子どもの頃、駅前大通り天満屋の前に、陸橋があった。階段を上ったところに、両脚を失った白装束の傷痍軍人がうずくまっていた。ものものしい音楽を鳴らし、白い木綿に厳めしい文字を書きつけ、その人はひたすらうずくまっていた。蔵王の祖母を訪ねるためバスを乗り換える、そのために彼の前を通らざるをえなかった。私は怖かった、ひたすら怖かった。それが、戦後19年経って生まれた私の、初めての「戦争」体験だった。大島渚の初期の映像作品『忘れられた皇軍』には、私が見たのと同じような傷痍軍人が登場する。彼らは、戦争中は日本人として戦場に赴き障害を負い、戦後日本国籍をはく奪され、生活の手だてを失った韓国人であった。

そんな街の風景はとうの昔に消え去った。だが、決して無かったことにしてはいけない。

(S. N)